

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月22日現在

機関番号：32625

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21330183

研究課題名（和文） 子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究～戦後男女共学制の総括～

研究課題名（英文） A Comprehensive Study on the Development of Children's Gender Equality Idea in School Education —Reconsideration of Coeducation System after World War II in Japan —

研究代表者

橋本 紀子 (HASHIMOTO NORIKO)

女子栄養大学・栄養学部・教授

研究者番号：20138530

研究成果の概要（和文）：

本研究は、校歌・校訓の変遷の歴史的調査、人々の男女共学・別学観のインタビュー調査、高校生とOG/OBの意識調査、学校参与観察、フィンランド・イギリス・韓国での海外調査等々、幅広い視点から行われた。その結果、ジェンダー平等教育の発展・普及のための、以下の重点課題が浮き彫りとなった。(1)新しいジェンダー平等教育の内容づくりを教育課程の見直しも含めて行うこと。(2)そのためには、教材や授業記録等も含めて、これまでの教育実践の掘り起こし、優れた実践の典型化をはかり、テキスト作成に結びつけること、などである。

研究成果の概要（英文）：

We have carried out extensive researches as follows: (1) Historical investigation of school songs and school precepts (2) Interview research about peoples' viewpoint of co-education and single-sex education (3) Questionnaire surveys for a high school students and alumnus (4) Ethnographic research at high schools (5) Observation tours in Finland, U.K. and South Korea

As a result, the following important issues for the development and the spread of gender equality education were clarified: (1) Drafting a newly gender equality education along with the review of the curriculum based on the findings in these investigations. (2) Creating a textbook based on a model of good practices through reviews about past educational practices, including teaching materials and records.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	6,900,000	2,070,000	8,970,000
2010年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2011年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
年度			
総計	14,100,000	4,230,000	18,330,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：ジェンダー平等、学校教育

1. 研究開始当初の背景

1989年の学習指導要領の改訂で、「家庭一般」が選択必修となり、教育課程上の性差別

は取り除かれ、90年代後半～2000年以降に、東北・関東諸県で共学化の第3段階とも言われる公立高校の共学化が進んだ。しかし、共

学後、半世紀以上たち、女子が4割を占める現在でも、校歌に「健男児」が、校訓には「質実剛健」が残っているという男子校を前身とする高校が散見される。

また、現在、全国公立高校の98%以上が男女共学であり、2006年12月改訂の教育基本法から、「第5条 男女共学」が削除され、法制的には男女共学制は完成された感がある。しかし、一方で、中高生に広まるデートDVや集団レイプ事件、抜きがたい性的少数者への偏見等、子どもたちの間に、ジェンダー平等意識や多様な人間同士の対等平等な関係性が築かれていない状況がある。本研究は、このような事態を重視し、男女共学制とジェンダー形成の問題を歴史的、全国的に検証し、また、統計手法や学校参与観察の手法も含む総合的研究を行うことにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3点である。

(1) 戦後の男女共学制を歴史的に検討する共学高校の指導理念や校歌等の変遷と共学制が戦後の日本人の市民形成に及ぼした影響の調査

(2) 男女共学制度下の教育の実態調査をする。

高校生および教員・OB・OGの意識調査と学校参与観察による共学・別学校の人間形成上の実相と課題の析出

(3) 21世紀にふさわしいジェンダー平等教育の内容に関する課題提起を行う

各国の動向に学び、日本の現実に即した有効なジェンダー平等教育の内容を提起

3. 研究の方法

本研究は3年プロジェクトとして計画され、5つの作業課題をもって、各々に適した研究方法で進められた。

●主な調査法：

・海外調査を含む男女共学・ジェンダー平等教育、性教育関連資料の収集と分析

・量的、質的調査法の併用（質問紙調査、インタビュー調査、参与観察、フィールド調査法等）

●研究対象：別学が長期間存続してきた高校を中心に、主に公立高校を対象とした。

●目的に対応した課題：

目的1. 戦後男女共学制の歴史的検討

課題1. 高校の指導理念（教育目標、校訓、校歌）等の変遷に関する全国調査（資料収集等）

課題2. 共学制が戦後の日本人の市民形成に及ぼした影響に関するインタビュー調査

目的2. 男女共学制度下の教育の実態調査

課題3. 学校教育と子どものジェンダー形成の関わりに関する学校参与観察調査

共学・別学校への参与観察により、高校生の

ジェンダー形成と学校教育との関係を考察
課題4. 高校生、OG、OBに対する共学、別学制とジェンダー平等意識に関する調査

質問紙調査（「高校生の男女平等意識に関するアンケート」）とOG、OBへの面接調査

目的3. ジェンダー平等教育の課題提起

課題5. ジェンダー平等とジェンダー平等教育実践に関する海外調査を行う

①フィンランド（2009年9月）②イギリス（2011年2月）③韓国（2011年11月）

これら、5つの作業課題の遂行によって得られた知見全体が、新しい教育課程編成の視点に立つ、ジェンダー平等教育の内容作りに用いられる。

各作業課題の大枠の研究方法は上述のとおりであるが、第3課題の学校参与観察、フィールド調査の学校は、研究代表者の地元、埼玉県の県立女子高校、男子高校、共学高校と、京都の国立附属共学高校で行った。また、第4課題の高校生への質問紙調査は、埼玉県の学校参与観察許可校を含む7校で行った。なお、質問紙は、2005年に福島県で佐藤らが実施した「高校生の生活意識に関するアンケート」を参考にしながら作成した。

4. 研究成果

本研究プロジェクトは、現在、なお、進行中であるが、各課題毎の報告に見られるように多くの知見が得られつつある。

例えば、世代毎の男女共学体験者や別学体験者へのヒヤリングでは、家庭科や体育における教育課程上の変更が、予想外に人々のジェンダー観や、実際のスキル修得に影響を与えていたことがあげられる。

共学、別学校への参与観察からは、同じ家庭科の家庭基礎2単位でも、男子校は調理実習に多くの時間を割いているが、共学校では男女一緒に、保育に関する実験や実習をしているなど、別学、共学という集団の違いによる内容構成の違いが見られた。女子校では、合理的、科学的な食肉加工ビデオを教材にした授業や、親の介護と女性の就労継続問題などのグループ討議がなされるなど、女性の自立やエンパワーメントを図る内容だったが、このようなテーマこそ、将来のために、両性の討議によって深めたい事項であると考えられる。

OG・OB調査からは男子校出身者の多くがジェンダー平等に関わる教育を受けておらず、ジェンダー平等教育の充実・発展のためには、男子校の男子を初め、男子を含めたジェンダー平等教育をどのように構成するかが大きな課題となる事が判明した。また、埼玉県の県立高校生の意識調査で、最も上昇志向を強く示したのが別学進学校男子であり、共学進学校男子は、共学職業高校男子より、非競争的で、将来不安的な傾向を強く示した。これ

は、この学校がその地域の3番手進学校であるということに由来する要素と、男女共修の家庭科と、その内容からの影響が考えられる。

さらに、海外で実践されている“ジェンダーと教育”や“セクシュアリティ教育”から、その内容ばかりでなく、教材、教具、教育方法の点でも多くの事柄を学ぶことが出来た。本研究は、～戦後男女共学制の総括～という副題が示すように、校歌、校訓の変遷や人々の男女共学・別学観、現存高校生とOG/OBの意識調査、学校参与観察等々、広い視点から問題を捉えるもので、結果としてジェンダー平等教育の発展・普及のための重点課題を浮き彫りにするものとなった。

今後、これらの知見の上に、新しいジェンダー平等教育の内容づくりを教育課程の見直しも含めて行うことが重要である。そのためには、教材や授業記録等も含めて、これまでの教育実践の掘り起こし、優れた実践の典型化をはかり、テキスト作成に結びつけることなどが、考えられよう。

これと関連した先行研究として、古くは橋本紀子『両性の平等と学校教育』（東研出版1998年）があり、フェミニズムとジェンダー平等教育、双方の視点からの先行研究として、木村涼子、古久保さくら編著『ジェンダーで考える教育の現在—フェミニズム教育学をめざして』（解放出版社、2008年12月）がある。ここでは、ポスト性別役割分業社会の中でジェンダーによって不利益を受ける男子も視野に入れ、ジェンダー変容期に生きる若者たちの新たな課題に対応できるような理論と実践が目指されている。

このような問題意識を大枠で共有しながら、より全国的・歴史的に各地の実践を掘り起こし、日本の一般的な学校で日常的に活用できるような実践のあるべき姿を追求していくことを今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①茂木輝順、橋本紀子、杉田真衣、良香織、高校生のジェンダー平等意識と将来観に関する調査研究：共学進学校・別学進学校・職業科高校の比較を通して、女子栄養大学紀要、41号、2010年、pp. 77-87、査読有

②橋本紀子、2010年夏期 山口県豊浦高等学校男女共学化に関する調査概要、教育学研究室紀要「ジェンダーと教育」研究、9号、2011年、pp. 46-49、査読無

③橋本紀子、2011年夏期 宮城県・岩手県・

秋田県での男女共学、教育学研究室紀要「ジェンダーと教育」研究、9号、2011年、pp. 50-61、査読無

④森岡真梨、産まない選択と社会的受容、教育学研究室紀要「ジェンダーと教育」研究、9号、2011年、pp. 21-36、査読無

⑤橋本紀子、中学校社会科公民的分野教科書のジェンダー視点からの分析、女子栄養大学共同研究「ジェンダー視点から見た教科書・教材の現状とその課題」報告書、2012年、pp. 2-24、査読無

〔学会発表〕（計2件）

①良香織、家庭科におけるジェンダー/セクシュアリティ教育の現状と課題：高校生と家庭科教師の調査から、日本教育学会、2009年8月29日、東京大学

②田代美江子、日本における性教育の実態：性教育に関心のある教員を対象とした実態調査、日本教育学会、2009年8月29日、東京大学

〔図書〕（計2件）

①橋本紀子、日本国憲法と教育基本法下のジェンダー平等教育—学校教育を中心に、米田佐代子・大日方純夫・山科三郎編「ジェンダー視点から戦後史を読む」大月書店、2009年、pp. 47-77

②橋本紀子、教育分野の到達点と課題—学校教育を中心に、日本婦人団体連合会編「女性白書2009」ほるぷ出版、2009年、pp. 33-37

〔その他〕

①橋本紀子、井上恵美子、田代美江子、井谷恵子、木村浩則、杉田真衣、良香織、茂木輝順、森岡真梨、丸井淑美、篠原久枝、金香男『子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究—戦後男女共学制の総括—（平成21～23年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書』2012年03月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 紀子 (HASHIMOTO NORIKO)
女子栄養大学・栄養学部・教授
研究者番号：20138530

(2) 研究分担者

井上 恵美子 (INOUE EMIKO)
フェリス学院大学・文学部・教授
研究者番号：80259316

田代 美江子 (TASHIRO MIEKO)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：40297049

井谷 恵子 (ITANI KEIKO)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：80291433
(2009年度～2010年度研究分担者→2011年度
連携研究者)

木村 浩則 (KIMURA HIRONORI)
文京学院大学・人間学部・教授
研究者番号：40315271
(2009年度～2010年度連携研究者→2011年度
研究分担者)

(3) 連携研究者

杉田 真衣 (SUGITA MAI)
金沢大学・学校教育系・准教授
研究者番号：50532321

良 香織 (USHITORA KAORI)
宇都宮大学・教育学部・専任講師
研究者番号：10459224

茂木 輝順 (MOTEGI TERUNORI)
女子栄養大学・栄養学部・特別研究員
研究者番号：40570677
(2009年度研究協力者→2010年度～2011年
度連携研究者)

水崎 富美 (MIZUSAKI FUMI)
女子栄養大学・栄養学部・准教授
研究者番号：40510136
(2009年度～2010年度連携研究者)

(4) 研究協力者

森岡 真梨 (MORIOKA MARI)
女子栄養大学・栄養科学研究所・客員研究
員

丸井 淑美 (MARUI YOSHIMI)
女子栄養大学・大学院栄養学研究科・博士
後期課程